

渤海使節を迎えた平安皇権

―『源氏物語』の一風景―

小山 利彦

一、はじめに

王朝時代の対外交流史を辿つてみると、大陸や半島との関連で一般的に注視されるのは遣隋使や遣唐使の存在であろう。しかし平安朝になると唐も衰退期に入り、寛平六年（八九四）菅原道真の建議で遣唐使も廃止されてしまう。そんな中で半島から渤海使節が度々来朝しているのである。

渤海使節は当初將軍などの武官を大使としていたが、平安時代においては文人官僚に移行している。平安貴族社会では文人貴族が渤海使節の応待を担っていることで、日本側の意向に沿う実態となっている。宮中では朝貢使節と見做しているが、渤海の関心は交易であつて、日本から得る高価な産物であつた。宮中社会では毛皮や唐からの舶来品などに高い関心を払っている様相が窺える。

三十四回の使節の官職や教養を検してみると、渤海側も漢詩文などの唐文化を身に付けた大使や随員が務めるように転じている。応待する日本宮中においては文人・学者貴族が役割を果たすようになる。右大臣にまでに昇った菅原道真を嚆矢として、都良香・紀長谷

雄・島田忠臣・在原業平・大江朝綱らの文人貴紳が任を全うすることになる。その交流の際の宮中行事や宴の中で漢詩も詠まれ、勅撰漢詩文『経国集』『文華秀麗集』そして私撰集『菅家文章』にも入集されている。またその逸話が説話集に入っていたり、他文学作品にも関連している。高麗人との交流は『源氏物語』においても、光源氏が賜姓源氏として始発することになる物語が、鴻臚館での高麗の人相見の判断を重視しての事であつた。『三代実録』では渤海大使王文矩が時康親王（後の光孝天皇）を望見して、「至貴の相あり、それ天位に登りたまふこと必ずなりと云々」と予言した、と伝えている。

一方宮中においても渤海使節の接待として、宮中行事の聖場に参集させ、平安皇朝の栄華の実態として貴族達と同席させている。例えば初春の朝賀や男踏歌、曲水の宴、それに五月の端午の節供等の記録に渤海使節が登場している。これらの宮中行事は『源氏物語』にも描写されている。初音の巻や螢の巻において、光源氏の栄華の御殿六条院の四季を彩っている。賜姓源氏光の権勢の表出する様相となつている。殊に男踏歌は『源氏物語』が他の作品には見られない詳細な描写となつている。その古注釈は研究上も注目される資料を提供している。

二、平安朝の渤海使節と文人貴族

多賀城陸奥国府跡^(注)には国指定重要文化財多賀城碑、即ち『奥の細

道』の旅で芭蕉が訪れた「壺の石ぶみ」には渤海の一国名「靺鞨」^{まっかつ}が記されている。

靺鞨国の界を去ること三千里

と記されて、陸奥から靺鞨までの距離を示している。末尾には

天平宝字六年十二月一日

という建立の年月日が記されており、七六二年の史跡碑であることが判明する。船が来着する出羽国から北西の隣国、陸奥の行程が類推できよう。本章では平安朝における宮中と渤海使節との交流の実態を究明してみたい。

渤海使が来朝しても、日本側への朝貢という形式が整っていない場合もある。そうした来朝には入京させない事例もあるし、宮中行事に参列させて接待することもない。これからあげる来朝事例は平安宮中において接待している場合を掲げてみる。

第十四次渤海使節一行の大使は慰軍大將軍大昌泰である。前使節は来朝の間隔が短いことで日本側は難じていたが、今回は延暦十七年（七九八）に入京している。桓武天皇の御代で、平安京遷都後五年ということもあり、渤海使も国書持参ということで余裕のある接待を受けている。『日本後紀』『類聚国史』『日本紀略』等に記されて

いる。余り短い間隔での来朝を禁じた前年の「六年一貢」案も撤回されている（『日本後紀』）。また延暦十八年（七九九）元旦の大極殿での朝貢にも渤海客が陪席している。七日には龍尾道上に仮殿を建てて天皇が臨御して歌舞が奏上され、渤海客も招かれて、賜禄が行なわれている（『日本後紀』）。十六日も天皇は大極殿に出御し、渤海客も招いて楽を奏し、全員庭で踏歌を繰り広げている。十八日は天皇が朝堂院に出御して射を催し、五位以上の貴族の後、渤海客も射に参加している。このような歓待に与って、路難を厭わなければ毎年でも来朝を許す旨の国書を受けて、滋野船白の送渤海使に伴なわれて、帰国している（『日本後紀』）。十四次渤海使節大昌泰一行は、平安朝初代帝王桓武天皇の宮中行事に歓待される栄を受け、平安朝における渤海交流の輝かしい始発を示している。

十七次渤海使節は高名な文人王孝廉が、平安朝三代目の嵯峨天皇の御代に来朝している。弘仁五年（八一四）九月三十日の来着である。王孝廉の話『文華秀麗集』所収「従出雲州書状両箇勅使」によつて、出雲に辿り着いていることがわかる。王孝廉一行は弘仁六年（八一五）の元旦、朝賀に参列している（『日本後紀』）。正月七日には五位以上と渤海使節に宴を催し、大使王孝廉に従三位を授けている（『日本後紀』）。その際に使節と接待の文人との間で詩の贈答を行い、『文華秀麗集』に入集されている。王孝廉の七言絶句「勅を奉じて内宴に陪る詩。一首。」がある。「日宮」即ち宮中の天子の御座周辺は、五色の飛雲が永世の光に輝いていることを詠んでいる。録事釋

仁貞の詩「七日禁中にして宴に陪る詩。一首。」を詠んでいる。日本側には滋野貞主が渤海使節をもてなすために、出立する際に贈った巨勢識人の七言律詩がある。坂上今雄には「秋朝鴈を聴き、渤海入朝高判官・釋録事に寄す。一首。」がある。坂上今雄には「渤海大使が寄せられし作に和す。一首。」がある。先の滋野貞主には「春夜鴻臚に宿りて、渤海入朝王大使に簡す。一首。」がある。桑原腹赤には「渤海入覲副使が『公に龍顔に對ゆることを賜ふ』の作に和す。一首。」がある。これらの詩題の中に大使王孝廉、副使高景秀、判官高英善・録事釋仁貞の渤海人の名が見える。末尾にこれら領客使を始めとする日本側文人に対して答礼の詩「邊亭に在りて、賦して『山花』を得たり、戲に兩箇の領客使並びに滋三に寄す。一首。」を大使王孝廉が吟じている。領客使は坂上今雄と同今繼で、「滋三」は滋野貞主のことで、代表的な嵯峨朝文人に対して感謝の意を込めた挨拶をしている。ところが、五月十八日帰国のための出帆後間もなく逆風に遭って、乗船が損壊してしまう。さらに再出発を待つ間六月十四日に王孝廉が痼瘡で没してしまい、改めて正三位を追贈される。録事釋仁貞も病没してしまう。華やかな文化交流に彩られた一行であつたが、悲劇の末路となっている。

十九次の渤海使節は文籍院述作郎の任にある李承英である。弘仁一〇年（八一九）十一月二〇日に来朝している。翌十一年元旦は渤海使節は文武百官とともに朝賀に参列する。十六日は豊樂殿で宴が催され、踏歌の席に陪している。詩の交流は記録になく、正月二十

二日に帰国の途についている。

二十次の渤海使節は弘仁十二年（八二二）十一月一日、政堂省左允王文矩が来朝している。翌十三年（八二三）元旦は朝賀に参列している。十六日には天皇が豊樂院に出御して、踏歌が奏せられる。特筆すべきは王文矩らが打毬を演じていることである。『経国集』に嵯峨天皇と滋野貞主の詩が入集されて、その関心の高さが窺える。内容は後章で触れたい。二十日にも一行を饗応している。翌日王文矩一行は帰国の途についている。もつとも安定した半島との交流になつている。

二十二次使節は天長二年（八二五）十二月三日、政堂信少卿の高承祖が来朝している。二十一次渤海使節は藤原緒嗣が「渤海客徒は實に是商旅也」（『類聚国史』）ということで、入京させたのは天長三年（八二六）五月八日の事であつた。渤海使節には叙位を授け同月十四日には一行は帰途に就いている。

二十五次の大使は三度目の王文矩である。嘉祥元年（八四八）十二月三〇日能登に一行百人もの員数で来朝している『続日本後紀』。仁明天皇の御代で、天皇は嵯峨皇子であつた。年期未満ではあるが、遠路荒波という苦難にも関わらず来朝したということで、厚遇を与えている。同二年（八四九）五月三日豊樂殿で宴を催し、大使王文矩にはこれまでで最高の従二位を授けている。五月五日には武徳殿における騎射に陪席させて、一行には薬玉を賜わっている『続日本後紀』。五月十二日一行は帰国の途に就いている。一章でも記した

ように王文矩は時康親王（後の光孝天皇）の至貴の相を見て、天子の位を極める人と予言したという（『三代実録』）。

二十六次の大使は楊成規で貞観十三年（八七一）十二月十一日の来朝である（『三代実録』）。京都で咳逆病が流行し、渤海使節の毒気という風評が立ち、二十日のみ入京。在原業平や藤原佐世らが接待している。楊成規には従三位が授けられている。五月二十四日は橘広相を遣わして曲宴を催し、詩文を交流している（『三代実録』）。同二十五日に帰途に就き、都良香が見送っている（『三代実録』・『都氏文集』）。

三十次の大使は高名な文人裴頌が元慶六年（八八二）十一月十四日に来朝する。翌七年二月二十一日渤海使節に林邑楽を奏するため、に楽人百七人に修させている（『三代実録』）。菅原道真や紀長谷雄・島田忠臣を接待使にする。同年五月三日陽成天皇は豊楽殿に出御し、宴を催し裴頌に従三位を贈る。渤海使拝舞。女楽一四八人の舞。五月五日武徳殿で騎射を催す。続命縷や菖蒲蘘を賜う（『三代実録』）。五月十日朝集堂で渤海使を饗し、裴頌に御衣一襲を賜う。同十一日道真らは五十九首を唱和し、『菅家文草』「鴻臚贈答詩序」を作っている。同十二日渤海使節は帰途に就いている。

三十二次使節は寛平六年（八九四）十二月二十九日に来朝し、大使は再び裴頌である。寛平七年（八九五）五月七日裴頌ら入京。五月十一日宇多天皇豊楽殿に行幸し、宴を催す。同十四日朝集堂で饗す（『日本紀略』）。同十五日道真・長谷雄ら鴻臚館で酒饌し、詩文を

交歓している。同十六日渤海使節は帰途に就いている。

三十三次使節は延喜八年（九〇六）一月八日大使裴頌が来朝している（『日本紀略』）。四月二十一日曲宴を催している（『日本紀略』）。五月十一日豊楽院において饗宴を催す（『貞信公記抄』）。同十二日宇多法皇、裴頌に書を贈っている（『本朝文粹』）。『本朝文粹』巻第九、大江朝綱「夏の夜鴻臚館にして、北客を餞す」は人口に膾炙しており、『江談抄』『古今著聞集』にも収められる説話となっている。

これら平安朝天皇が渤海使節を厚遇した事跡について、天皇並びに渤海大使、そして渤海王について年代順に一覧表を提示してみよう（次頁表参照）。

三、渤海使節を厚遇した天皇

渤海使節を厚遇した天皇は親政を布いて、後世に賢帝としての評価を与えられている。桓武天皇は平安京に遷都して、政庁である大内裏も未完成という厳しい状況下で政治体制を遂行している。^{（注3）}七九四年から五年目、都が整った頃に十四次の渤海使節が来朝したのである。正月の朝賀、踏歌、射などに参列させる。宮中での祭祀・芸能を見せ、唐伝来の行事も加えている。

十七次・十九次・二十次の使節を迎えたのは嵯峨天皇である。嵯峨天皇は前帝の平城天皇に代わって、父帝桓武天皇が建設した平安京での政治体制をさらに充実させた。^{（注4）}平安時代の代表的天皇で弘仁

渤海使節と厚遇した平安天皇

来朝 順次	来朝年	年号	天皇	事跡月日	渤海王	来朝渤海 大使	鑑賞・文化記事、その他
14次	798	延暦17	桓武	12月27日	大靺鞨	大昌泰	国書・方物を献上。→翌年4/15に帰国※前年の6年1貢案撤回(後紀延暦18.5.13条/類聚国史193/紀略)。大極殿で朝賀。踏歌、弓。
17次	814	弘仁5	嵯峨	翌1月7日	大言義	王孝廉	宴を催す。この時、渤海使と接待の文人と詩を贈答(後紀/文華秀麗集)。
17次	814	弘仁5	嵯峨	翌1月16日	大言義	王孝廉	豊楽院にて、宴を催す。踏歌を奏す(後紀)。
17次	814	弘仁5	嵯峨	翌1月19日	大言義	王孝廉	空海、返書を送る。書ならびに詩を贈られたことを謝し、孝廉の叙位を慶賀(高野雄筆集下/平安遣文4398号)。
19次	819	弘仁10	嵯峨	翌1月16日	大仁秀	李承英	豊楽院にて、宴を催し、踏歌を奏す(類聚国史72/紀略)。
20次	821	弘仁12	嵯峨	翌1月16日	大仁秀	王文矩	豊楽院にて、宴を催し、踏歌を奏す。王文矩ら、打毬を行う(類聚国史72・194/紀略/経国集11)。
22次	825	天長2	淳和	翌3月1日	大仁秀	高承祖	※藤原緒嗣が渤海使は商旅であるとして、頻繁な来日を非難する(類聚国史194)。
25次	848	嘉祥1	仁明	翌5月5日	大彝震	王文矩	武徳殿における騎射の儀に列席。王文矩に従二位を授けている。(続日本後紀)
28次	871	貞観13	清和	翌5月17日	大玄錫	楊成規	右馬頭在原業平を鴻臚館に遣わして渤海使に時服を賜う(三代実録)。楊成規に従三位を授ける。曲宴。詩文あり。
30次	882	元慶6	陽成	翌4月21日	大玄錫	裴頌	大使裴頌に心接させるため、式部少輔兼文章博士加賀權守菅原道真を仮に治部大輔に、美濃介島田忠臣を仮に玄蕃頭となす(三代実録/菅家文草7鴻臚問答詩序)。
30次	882	元慶6	陽成	翌5月3日	大玄錫	裴頌	天皇、豊楽殿に御し、宴を催す。雅楽京、鼓篋を陳ね、内教坊、女楽を奏す。妓女148人の舞あり(三代実録)。
30次	882	元慶6	陽成	翌5月5日	大玄錫	裴頌	武徳殿における騎射に列席(三代実録)。
32次	894	寛平6	宇多	翌5月15日	大璋暗	裴頌	菅原道真・紀長谷雄らを鴻臚館に遣わし、酒饌を賜う。道真・長谷雄および道真の門下生10人、大使裴頌らと詩文を交歓(紀略/菅家文草5/北野天神御云)。
33次	908	延喜8 到着報 告	醍醐	6月	大譚譚	裴謬	(4月21日、伯耆で曲水の宴。5月5日、南殿で使節団の馬20匹御覧) 6月、鴻臚館において、饗別の宴を催す。詩文を交歓、大江朝綱、この時の詩卷の序を作る。その中の「前途程遠 馳思於雁山之暮雲」云々の一句は名句と賞えられる。ついでは裴謬、帰途に就く。越前権掾兼中、帰国途中の謬に会い、送別の詩を贈る。璆、その詩に感動。その後、在中が勅命によらずに私に外国の使者と詩文を唱酬したことは違法であると問題となる。しかし、在中の詩が蕃客を感動させ、文名を異域に広めたので、特に有免される(紀略/本朝文粹9/江談抄/古今著聞集4/帝王編年記)。
	926	延長4	醍醐		大譚譚	渤海滅亡	

*渤海使来朝回数:計34回

参考文献:『対外関係史総合年表』吉川弘文館・1999、『日本史総合年表』吉川弘文館・2001、その他記載の文献

の治と賛えられる聖帝である。文化も隆盛し、遣唐使や唐留学経験を有する文人や、政事と文事に精通した貴族達を輩出している。藤原冬嗣や緒嗣、清原夏野、菅原岑守らが活躍している。新たに平安京地主神・賀茂明神の御杖代として賀茂斎院制度を始め、初代は有智子内親王を奉仕させている。来朝渤海大使も王孝廉や王文矩など高名な文人で、『文華秀麗集』・『経国集』を飾る輝きを記し留める。迎える宮中行事として豊樂殿で踏歌を催す。さらに王文矩は打毬という遊戯を見せて、詩文に詠まれている。

二十五次の大使は王文矩で三度目の来朝となる。迎える天皇は仁明帝であり、嵯峨第二皇子である。^(注5)『寛平御記』には

昔深草の聖帝、内宴之日に起ちて舞ひ、又笛を吹きて歌ふ

と評されるように、歌舞に造詣の深い天皇である。淳和天皇の御代では、藤原緒嗣が渤海使節の頻繁な来朝を難ずることもあったが、仁明天皇は王文矩には従二位という歴代大使最高位を授けている。端午の節供には武徳殿での騎射に列席させている。

二十八次の大使は楊成規である。清和天皇の御代である。^(注6)藤原良房を後見としての権力体制が実態であったと想定される。清和天皇は学問・文化を好み、仏教心も篤い人格であったとされる。大使楊成規に従三位を授けている。曲宴を催し、詩文も行なわれている。右馬頭在原業平も鴻臚館に遣わされている。

三十次の大使は高名な文人裴頌である。迎える天皇は陽成帝である。陽成天皇は『愚管抄』にも記されるように、乱行が重なり、結局光孝天皇踐祚となってしまう人生を辿っている。^(注7)関白藤原基経の後見で政務が代行されているものと想定される。裴頌は元慶七年(八八三)四月二十八日に入京している。それ故に五月三日に豊樂殿で宴を賜り、内教坊の妓女一四八人の女楽が行なわれる。大使裴頌に従三位を授けている。五月五日には武徳殿において、騎射が催されている(『三代実録』)。渤海使節も楽しんでゐる。大使や録事以上の使節には統命縷、下級の者には菖蒲縷を賜わっている。五日は雨天で途中で中止となったため、翌日に左右馬寮の競馬、四衛府による馬芸が追加されている。十日には朝堂院内の朝集堂において使節一行に饗を賜わっている。十二日に勅書と太政官府が下賜されている。三十二次の大使は二度目の来朝となる裴頌で、迎える帝王は寛平の帝、宇多天皇である。宇多天皇は藤原基経の没後、親政を進め、後世寛平の治と賛えられる。^(注8)讓位に際しては『寛平御遺誡』を残している。皇権を高めた天皇として名を留めている。寛平六年(八九四)十二月二十九日に来朝し、入京したのは翌年(八九五)五月七日である。五月十一日豊樂殿に幸して、宴を賜わっている。十四日には朝集堂で饗を賜わっている。十五日には菅原道真・紀長谷雄らを鴻臚館に遣わし酒饌を賜わっている。詩文の交歓は『菅家文草』に収められている。十六日には帰国の途についている。

三十三次の大使は裴瑋で、裴頌の子息である。来朝は延喜八年(九

○八）正月八日の事で、帝王は醍醐天皇である。^{（注9）}父宇多法皇も健在

で、ただ道真は左遷されて既に黄泉にある。その親政は延喜の帝として治世を礼賛されている。六国史の最後を飾る『三代実録』や『延喜式』を編纂し、八代勅撰和歌集の嚆矢『古今和歌集』の勅命を出している。恒例行事として入京以前に四月二十一日に曲宴を催している。五月五日は天皇が南殿において使節を乗せる馬二〇匹を御覧になる儀を催している。五月十日に一行は入京している。十二日は宇多法皇が書を贈っている。十五日は使節の宴を催している。出京が近づいた頃、鴻臚館において両国文人間で詩を賦している。名高
い大江朝綱の「餞北客序」はその折の作である。三十四次も延喜十九年（九一九）十一月十八日に裴瑋が再来朝している。翌二十年（九二〇）五月八日鴻臚館に入京している。十二日の豊楽殿での饗宴において醍醐皇子重明親王が黒貂^{ふるき}の裘を八枚重ねて参列するという逸話を留めている（『江家次第』）。

四、渤海使節が列席した宮中行事

渤海使節が来朝するのは冬から春にかけての季節で、帰国するのは春から夏にかけての季節である。渤海はロシア沿海部・中国東北部・北朝鮮の地域に当る。日本とは日本海の北西部の方角から渡航して来朝することになる。それ故冬から初春にかけての北西の季節風を利用して渡航して来る。帰国する時は春から夏に吹く南東の季

節風に乗って渡海して行くのである。

それ故平安朝の宮中では初春の朝賀・正月中旬の男踏歌、晩春においては弥生上巳の節供における曲水の宴、夏においては端午の節供における騎射や馬御覧などが、渤海使節も列席して催されている。渤海大使王文矩が嵯峨天皇臨席の元で打毬を演じている。これらについて比較文化的視点を加味して考察してみたい。

（a）男踏歌による接待

桓武天皇が大昌泰一行に対して、嵯峨天皇が王孝廉一行と李承英一行と王文矩一行に対して、男踏歌を奏している。桓武天皇は平安京遷都した嚆矢としての帝王であり、嵯峨天皇は不安定な平安朝において親政を敷き、平安朝の政治体制を確立しており、聖帝とも位置づけられている帝王である。平安京遷都しての初春、未だ大内裏も完成していない中で、平安京を寿ぐような頌歌が七言漢詩の形式で唱和されている。

桓武天皇延暦十四年（七九五）正月の踏歌であった。『類聚国史』の「歳時部踏歌」や『年中行事秘抄』などにその歌詞が書き留められている。

山城頭^レ樂旧来伝
帝宅新成最可^レ憐
郊野道平千里望

山河擅^レ美四周連

新京樂 平安樂土 万年春

冲襟乃眷^奉八方中

不^レ日爰開億載宮

壯麗裁^レ規伝^二不朽^一

平安作^レ號驗^二無窺^一

新年樂 平安樂土 万年春

新年正月北辰来

満字韶光幾處開

麗質佳人伴^二春色^一

分行連^レ袂儻^二皇垓^一

新年樂 平安樂土 万年春

卑高泳沢治^二歡情^一

中外含^レ和満^二頌声^一

今日新京太平樂

年々長奉我皇庭

新京樂 平安樂土 万年春

新京となった山城国そして新装の宮中を華麗に唱いあげている。その内容は農作物の豊穰を祈るというより、唐風の宮中踏歌を思い起こさせる。院政期永久四年（一一一六）三善為康が詩文など各種文書類を集めた『朝野群載』に収められ、『河海抄』巻第十「初音」の

巻でも紹介されている「万春樂」の歌詞も、やはり年頭にあたつて皇宮の御代を寿ぐ内容になっている。踏歌の次第について詳細に記す資料としては『西宮記』と前述の『河海抄』である。前書は有職故実書らしく諸寮の官人達の行事準備段階から詳細に記している。後書は行事の当日のことを、延喜十三年（九一三）その他の諸例をも引きつつ記し留めている。

『河海抄』などの古注釈によれば催馬樂による歌舞が整えられて行く。「絹鴨」とか「なにそもそ」と称される歌詞は次の通りである。

なにそもそ なにそもそ きぬかも わたかも ぜにかも
ぬのかも なにそもそ

「此殿」の歌詞は次の通りである。

この殿は むべもむべも富みけり 三枝の あはれ 三枝
のはれ 三枝の 三つば四つばの中に 殿づくりせりや 殿づ
くりせりや

「竹河」の歌詞は次の通りである。

竹河の 橋の詰なるや 橋の詰なるや 花園に はれ 花園
に 我をば放てや 我をば放てや 少女伴^{めざしたぐ}へて

「我家」の歌詞は古楽書『楽家録』の「催馬楽歌字」に、次のように記されている。

我家は とばり帳も垂れたるを 大君来ませ賀にせむ 御肴
に何よけむ 鮑さだをかかせよけむ 鮑さだをかかせよけむ

絹や綿の多産や、屋敷ぼめ、妻問い、賀求めなど、初春に平安宮中そして究極的には天皇の御代の繁栄を祈念する宮中行事(図1)となっている。

踏歌は唐伝来の行事でもある。一九八四年拙稿を執筆した時は中国側に研究成果をまとめた論稿がなかった。^(注1) 西安・洛陽・揚州・南京・岳陽・長沙・成都・昆明・上海・杭州・北京と回り、博物館・陵墓・史蹟・研究機関を訪れた。南宋の都でもあった杭州の浙江博物館において、宮中画院待詔の大家馬遠筆の『踏歌図』の模写を目にした。早速『中国歴代絵画 故宮博物院藏画集Ⅲ』等を購入している。その後お会いした在京中国大使館文化担当一等書記官の御厚意により、北京の故宮博物院の担当者を教えて戴いた。その結果、『馬遠 踏歌図軸』CDと「影像資料使用授權証」を受け取ることができ、論稿では初めての提示となっている。馬遠『踏歌図』は貴重な視覚資料(図2)である。十三世紀初期までに描かれていると思われる。図の下方で農夫四人が田の畝で足を踏みながら踊っている(図3)。また、図の上部に書いた詩賛(図3)も興味深い。

宿雨清「畿甸」
朝陽麗「帝城」
豐年人樂「業」
壠上踏歌行

長安城内での華麗な催しというより、豊作を祈って畝で踏歌を舞っている。李白が七言詩「贈汪倫」で詠んだ、桃花潭における安徽省あたりでの農村の踏歌の風景を思わせる。前掲の平安朝の催馬楽の歌舞を連想させる風景でもある。中国の正月行事元宵節の風景も想定されることを、注1で掲げた拙著『源氏物語 宮廷行事の展開』所収論稿において指摘している。踏歌の歴史的事実としては日本の有職故実書『年中行事抄』に記される、唐玄宗皇帝の御代の書『朝野僉載』の記事で言う、「唐先天二年(七一二)正月十五日」の長安城内の踏歌が中国における最古の文献資料である。日本での文献上の初出資料は「天武天皇三年(六七四)」の踏歌であり、この日本側の史料の方が歴史的に古い史実となっている。

その上日本においては平安京の幕開けの七九五年正月に桓武天皇が催し、渤海使節を迎える宮中行事として、桓武天皇そして嵯峨天皇が催しているという歴史的事実がある。『源氏物語』における初音の巻・真木柱の巻・竹河の巻なども、歴史上における踏歌の皇権との連関という意識・思想によって理解すべきことと思われる。そうした視点に立脚するものとして、袴田光康論稿「男踏歌と宇多

図1 「熱田神宮踏歌神事における高巾子」

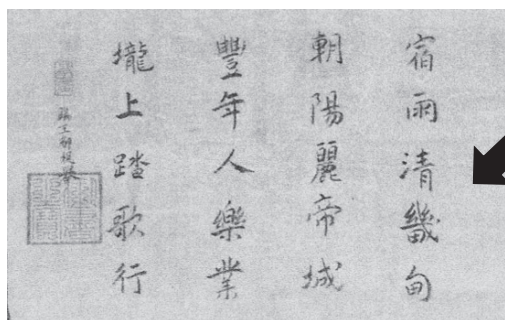


図3 『踏歌図』上部の詩賛（上段）と
『踏歌図』下部における四人の農民による
踏歌（下段）



図2 「馬遠『踏歌図』」

天皇―「天皇」から「帝王」への回路―^(注12)」や平間充子論稿「男踏歌に関する基礎的考察」^(注13)がある。初音の巻における六条院踏歌であれば、光源氏の皇権を示す行事として、踏歌が歴史上の出来事のように描写されているのである。

(b) 曲水の宴による接待

渤海使節が来朝する時期に関わらず、詩文を作るということは平安時代において至高の文化的営為である。曲水の宴は三月上巳という年中行事に加えて、浄め祓うという水辺で觴を流しつつ、詩文を詠むという文芸上の表現を作り上げる場にもなった。渤海大使は当初武官であったが、日本平安人の志向もあって文人を渡航させるようになる。曲水の宴は三月のみならず催されている。

二十八次使節では貞観十三年（八七二）五月二十四日、大使楊成規以下が曲水の宴を賜い、双方で詩を賦している。この使節の入朝に際しては五月十七日に右馬頭在原業平も鴻臚館に遣わされ、使節一行の応接を行っている『三代実録』。二十五日には離京に当たり、都良香が大使楊成規と交歓し、『都氏文集』には詩文や貂裘などの贈答があったことを記している。曲水の宴という唐風の催しを行なうことで、平安宮中の威光を示している。

三十三次は大使が菅原道真や紀長谷雄と交歓した裴頤の息、裴瑋が来朝している。この使節は大江朝綱らと詩文の交歓をし、

前途程遠、馳思於雁山之暮雲

の名吟を残したことで知られる。『本朝文粹』に詩文を留め、その逸話は『江談抄』や『古今著聞集』などに語られている。延喜八年（九〇八）来朝で、伯耆国まで迎えに出た領客使らとの間で、曲水の宴を催している。四月二十一日のことであった。宇多上皇を後立てにし、醍醐天皇の御代を飾る史実となっている。

曲水の宴は三月上旬の巳の日、その日に「洗濯祓除」^(注14)（『後漢書』礼儀志上）を行い、上巳の祓と称し、我国における通称は桃の節供と呼ばれている。曲水の宴は六朝時代に催されている。その歴史資料が書聖・王羲之の名筆とされる『蘭亭序』によって、東晋の永和九年（三五三）浙江省紹興の会稽山北の蘭亭において曲水の宴を張り、「一觴一詠」を楽しんでいることが窺える。唐長安城の宮殿内に曲水の宴を催す池苑、曲江池を設けている。史書や唐詩にも上巳の行事は記されている。こうした唐文化については平安朝の宮中においても既知の事として、宮中における年中行事に組み込まれている。図4は城南宮で催す曲水の宴である。

奈良・平安両朝の文学においても桃の信仰や人形による祓いの信仰が織り込まれている。記紀では伊邪那伎命が黄泉の国から逃げ帰る際に、桃の実を投げつけて助かっている。桃の節供における形代や雛飾りの風習も伝承している。渤海使節を迎えての曲水の宴も唐風の文化を継承していることを表出している。



図4 「城南宮の曲水の宴」

楊成規大使来朝に際しては、都良香などの文人貴族の活躍を進めたのは貞観の御代の史実であった。また大使裴瑒と大江朝綱らの詩文交歓によって、寛平の帝・宇多上皇や延喜の帝・醍醐天皇の御代の栄えを披露する。

『源氏物語』須磨巻において、三月上巳を描く場面がある。

弥生の朔日に出で来たる巳の日、「今日なむ、かく思ふことある人は、御禊したまふべき」と、なまさかしき人の聞こゆれば、海づらもゆかしうて出でたまふ。いとおろそかに、軟障ばかり引きめぐらして、この国に通ひける陰陽師召して、祓へせさせたまふ。舟にこととしき人形のせて流すを見たまふにも、よそへられて、

知らざりし大海の原に流れてひとかたにやはものは悲しき

とてゐたまへる御さま、さる晴に出でて、言ふよしなく見えたまふ。海の面うらうらとなぎわたりて、行く方もしらぬに、来し方行く先思しつづけられて云々

三月朔日がちょうど上巳の日なのである。海辺に流謫している賜姓源氏光は陰陽師を呼んで、等身大の人形を作り、大海の原に流している。主人公光が流離して、仕上げとしての御禊を行なっている。この願いに感じて天変地異が起こり、源氏の夢に父故院も立って、

住吉明神の導きでこの地を去るように悟すのである。光源氏は明石の入道の招きにより、明石君と結ばれ、唯一の姫君の誕生と、自らの帰京が適えられる。光源氏の撰関としての証しである、后がねの姫君をもうけ、権勢としての途を辿ることになる。

(C) 端午に関わる接待

仁明天皇が二十五次の王文矩一行に対し、武徳殿での騎射による接待をしている。王文矩は三度目の来朝で、嘉祥元年（八四八）十二月三十日のことである。前回の使節から来朝の期間が短いということもあり、翌年四月二十八日に入京している。端午の節供を迎えて武徳殿における騎射に招かれ、宴を賜わっている。息災長寿を願う薬玉も賜わっている。仁明天皇は嵯峨皇子として唐文化や神仙思想・歌舞にも深い関心を持つ帝王であった。

第三十次の文人大使裴頌の来朝時にも騎射を催している。元慶六年（八八二）十一月一日に加賀国に到着している。翌年（八八三）四月二十八日に入京している。陽成天皇は関白基経の後見に預って、菅原道真・紀長谷雄・嶋田忠臣等の文人貴族に囲まれている。五月三日には豊楽殿に出御して、渤海使節に宴を賜わっている。裴頌には従三位と朝衣を賜い、渤海人も拝舞している。端午の日には大雨の中武徳殿に出御して、騎射及び五位以上の貢馬御覧があった。大使から録事までは続命縷を、それより下位の者には菖蒲縷を賜わっている。雨で影響を受けた分、翌日も左右馬寮による競馬や四衛府

馬芸が行われている。五月十二日に都を離れている。

端午は中国では龍船競渡、今日東南アジア圏でペーロンやハーリーなどと呼ばれる龍船祭が行われる。^(注15)平安京においては龍に代わり陽の動物として馬を重んじている。正月の白馬や祭の神馬もあるが、やはり端午における馬を用いる遊びがもて囃される。闕腋の袍を着た武官が馬上からの射るのが騎射(図5)、二頭によって馬場で競争するのが競べ馬である。渤海は狩獵民族であり、馬を走らせる遊びを披露しているのである。天皇が武徳殿に出御して、薬玉が糸所から献上され、群臣は菖蒲鬘をつけて参内している。薬玉は『枕草子』「節は」の章段で五色の糸を垂らした薬玉が描かれ、重陽の菊の着せ綿まで飾り、無病息災を願う被具としての風習を伝える。『源氏物語』の六条院の趣向は後述する。

第十四次使節を迎えるに際しても、桓武天皇が出御して、正月十八日朝堂院において双方の貴族の間で射を行っている。特筆される打毬ぎつちゅうという馬術競技である。唐代陵墓の章懷太子墓壁画に『馬毬図』がある。また二〇〇五年愛知万博に出版されて注目を集めた、唐建国の皇帝李淵の曾孫李邕の墓の壁画『ボロ図』がある。この遊戯を第二十次の大使王文矩が演じてみせ、賞賛を集めている。『経国集』卷第十一には嵯峨天皇と滋野貞主の詠詩が続いて収められている。^(注16)



図5 「下鴨神社流鏑馬神事」における騎射

七言。早春観^ル打毬^ヲ。一首^{使^ハ海客^ヲ奏^ス此^ノ案^ニ。} 太上天皇

芳春煙景早朝ニ晴レ。使客乗^レ時^ニ出^ツ前庭^一。

廻^ラ杖^ヲ飛^ビ空^ニ疑^ヒ初月^一。奔毬轉^ジ地^ニ似^{タリ}流星^ニ。

左擬右承当^ツ門^ニ競^ヒ。分行群踏^ム虬雷^ノ声^一。

大^ニ呼^ビ伐^チ鼓^ヲ催^サ急^ニ。観^ル者猶嫌^フ都^ヲ易^キ成^シ。

七言。奉^ル和^シ観^ル打毬^ヲ。一首 滋貞主

蕃臣入観^シ逢^フ初暖^ニ。初暖芳時戲^ニ打毬^ヲ。

綉戸争^ヒ開^ク鳩鵲^ノ館。紗窗不^レ閉^チ鳳皇^ノ楼。

如^ク鈎^ノ月^ノ度^ル莫^カ階^ノ側^ヲ。似^{タリ}三^ノ点^ノ星^ノ晴^ニ綵^ノ騎^ノ頭^ニ。
武事^{ヨリ}從^レ斯^レ弱^ク見^レ輸^セ。輸家妒^ハ死^ス数^ノ千^ノ籌^一。

すでに遠藤光正論稿では三度に及ぶ王文矩の来朝について注目している。平安時代初期に政治体制を確立した嵯峨・淳和(嵯峨弟)・仁明(嵯峨皇子)の三天皇の時期に当ることである。漢詩文隆盛の時代、『文華秀麗集』『経国集』の勅撰集が編まれ、渤海使節と平安文人貴族の交歓の跡が刻まれている。嵯峨天皇はポロのスティックを、空に飛ぶ三日月のような鈎形の月に見立て、飛ぶ毬を流星と見成している。唐の陵墓の壁画に描かれたポロの躍動を詠みあげている。滋野貞主の詩には漢の武帝が築いた楼閣が「鳩鵲館」であり、「鳳皇楼」は後宮の一殿舎で、「莫階」は聖帝堯の代の瑞草である。嵯峨天皇の宮殿が中国のそれに喩えられる程の素晴らしい風景を備えていることを贅えている。王文矩が入京した時期で打毬を一月に演じているわけだが、平安朝の宮中行事としては騎射等と同様に端午の遊戯となっている。

仁明天皇承和元年(八三三)五月八日条には端午の遊戯が記されている。

丙辰(六日)、御^ニ同殿^一、観^ニ親王以下五位已上所^ノ貢競馳馬^一。
戊午(八日)、亦御^ニ同殿^一、令^ニ四衛府騎^ニ尽種種馬芸及打毬之態^一。『続日本後紀』。

武徳殿において、六日には、親王以下五位以上の献じた馬を競い馳せさせている。八日には四衛府の武官にいろいろな馬芸を尽くさせた後、打毬が行なわれている。西宮左大臣源高明の有職故実書『西宮記』卷三における五月六日の記事に記されている。「打毬者四十人」ということで、終わりには打毬楽（図6）を奏させている。

光源氏は皇統の血筋を保ちつつ、貴種流離の体験もあり、神聖な人格を有した女君の助援を得ながら、上なき位を極めて行く。須磨の海辺では三月上巳の祓として等身大の人形を流している。帰京もかない、宮中に復帰し、少女の巻では六条院を造営している。夏の町は端午の節供の催しにふさわしい造作である。

東面は、分けて馬場殿つくり、埒結ひて、五月の御遊び所に、水のほとりに菖蒲植多しげらせて、むかひに御覧して、世になき上馬どもをととのへ立てさせたまへり。

馬場を造り、御覧には素晴らしい名馬を飼い、水辺には菖蒲を植えて、端午の遊芸をするのにふさわしい造作にしている。正月には初音の巻で男踏歌の一行も参入している。平安京遷都の初春を飾り、渤海使節にも陪席させた宮中行事である。クライマックスとなる端午の遊芸は螢の巻に描かれる。渤海使節にも授けられた「葉玉」も玉鬘の許に贈られている。午後になって馬場では馬術の遊芸が行なわれる。



図6「打毬楽」（天理大学雅楽部）

末の刻に、馬場殿に出でたまひて、げに親王たちおはし集ひたり。手結の、公事にはさま変りて、次將たちかき連れ参りて、さまことにいまめかしく遊び暮らしたまふ。女は、何のあやめも知らぬことなれど、舍人どもさへ艶なる装束を尽くして、身を投げたる手まどはしなどを見るぞをかしかりける。南の町も通してはるばるとあれば、あなたにもかやうの若き人どもは見けり。打毬樂、落蹲など遊びて、勝負の乱声どものしるも、夜に入りはてて、何ごとも見えずなりはてぬ。舍人どもの禄品々賜る。いたく更けて、人々みなあかたまひぬ。

馬への乗尻は武徳殿の催しよりも身分の高い近衛中將・少將らまで馳せ参じている。騎射や競馬が催される。奏樂は打毬樂と落蹲が演じられている。六条院は宮中以上の造り様である。ここで雑芸の中で打毬が演じられているという説がある。^(注18)「身を投げたる手まどはし」を日向一雅論稿では注視して、打毬説を主張する。王文矩一行の打毬を実際に目にした嵯峨天皇と滋野貞主は「廻杖」いわゆるスティック、「流星」に見たてる毬即ち打毬樂であれば毬子の方に氣を向けている。その速さが驚きなのである。図5における賀茂御祖神社の流鏑馬神事における騎射を拝観すると、關腋の袍を身に付けた武官が弓を左手に持ち、右手で弓弦を引っ張っている。両手は手綱を握ってはいない。騎射の両手は馬を抑えていない。両足のみが馬に付けた鐙にかかっているのである。袍の袖をなびかせて、射

かける弓矢だけ手に持って手を支える馬具はない。こうした不安定な乗り方をしてなくてはならない。騎射のこうした乗り方が「身を投げたる手まどはし」なのではあるまいか。打毬や競べ馬の乗り手は片方の手（右利きなら左手）で手綱を握っていられるのである。論者は武者姿での打毬を見たことがある。ほとんどが片手スティック、もう一方の手は手綱を握っている。両手でスティックを持つのはかなり高度な技能を有した者である。

本稿では、蜚卷の六条院夏の町での端午の節供を描いて、邸宅主である光源氏の栄華を祈念しているものと理解したい。渤海使の来朝において使節一行に対し、平安朝の天皇が賜わった、朝賀・男踏歌・曲水の宴・騎射などの端午の節供などの宮中行事参列の様相には皇権の發揮の風景を確認できる。そうした皇権の構造は、『源氏物語』の賜姓源氏光や六条院の周辺において展開される風景にも共通するものと見做したい。

注1 二〇一三年一〇月に多賀城遺跡・東北歴史博物館を探訪。多賀城碑は格子囲いの覆屋に保存され、複製は博物館に展示されている。碑文は多賀城と京・蝦夷・常陸・下野とともに唯一の異国である靺鞨との距離などを記している。靺鞨人は八世紀中期に第三代大欽茂王が唐から渤海の名を与えられ、渤海国王を名乗るようになった。

注2 一九次李承英「行については『類聚国史』『日本紀略』の記事による。

注3 桓武天皇については村尾次郎著『桓武天皇』（人物叢書版、吉川弘文館、一九八七年）を参考にしている。

注4 嵯峨天皇については、目崎徳衛論稿「政治史上の嵯峨上皇」（『日本歴史』二四八号、一九六九年一月所収）を参考にしている。

注5 仁明天皇については福永光司論稿「仁明天皇と唐の高宗天皇大帝」（『国史東遊・春鶯囀一具』日本文化財団、一九九四年）を参考にしている。

注6 清和天皇については角田文衛論稿「良房と伴善男」（『王朝の映像』東京堂出版、一九七〇年所収）を参考にしている。

注7 陽成天皇については角田文衛論稿「陽成天皇の退位」（注6の『王朝の映像』所収）を参考にしている。

注8 宇多天皇については目崎徳衛論稿「宇多上皇の院と国政」（古代学協会編『延喜天曆時代の研究』吉川弘文館、一九六九年四月）を参考にしている。

注9 醍醐天皇については上横手雅敬論稿「延喜天曆期の天皇と貴族」（『歴史学研究』二二八号、一九五九年二月所収）や拙稿「延喜・天曆の皇権——『源氏物語』に描かれた風景——」（拙著『王朝文学を彩る軌跡』武蔵野書院、二〇一四年所収）を参考にしている。

注10 小島憲之著『国風暗黒時代の文学 中（上）』（塙書房、一九七三年）に現代語訳を収めている。

注11 拙稿「男踏歌（1）——中国・日本そして『源氏物語』における——」（『専修大学人文科学研究月報』九九・一〇〇号、一九八四年十一月所収）、「同題（2）」（『専修大学人文科学研究月報』一〇一号、一九八五年一月所収）。またこれらを改稿・加筆して拙著『源氏物語（宮廷行事の展開）（おうふう・一九九一年九月）に収める。張鳴論稿「唐宋『踏歌』考釋（上篇）」（日本大学文学部人文科学研究『研究紀要』六一号、二〇〇一年七月所収）。張鳴論稿「同題（下篇）」（黄砥鋒編『第二届 宋代文学国際研討会論文集』江蘇教育出版社、二〇〇三年六月所収）。趙維平論稿「奈良、平安時代における中国音楽の受容と変容——踏歌の場合」（『国際日本文化研究センター編』『日本研究』四三号、二〇一一年三月所収）。趙維平論稿は日本語使用で有難いが、序章の末尾部分で発言している「奈良・平安時代の文化受容についての問題はこれまであまり研究されていなかった」ということは首肯できかねる。引用本文の現代語訳は不要で、むしろ考証・解釈篇を待ちたい。

注12 袴田光康論稿「男踏歌と宇多天皇——『天皇』から『帝王』への回路——」（『文学研究論集』第七号、一九九七年九月所収）を参考にする。

注13 平間充子論稿「男踏歌に関する基礎的考察」（『日本歴史』六

二〇号、二〇〇〇年一月所収）を参考にする。

注14 拙稿「源氏物語などに見る節供―桃と菖蒲の祓―」（季刊『悠久』第三十三号、一九八八年四月所収）を改題・加筆して、拙著『源氏物語 宮廷行事の展開』に所収している。

注15 『源氏物語』と端午との関わりについても注（14）の拙稿において考察を加えている。光源氏の邸宅、六条院は四季の彩りを四町の町に設定して、仏の御国と紛えるような風景の構築は主人公が皇権に関わる至上の人物像であることを物語っている。

注16 『経国集』は（國民圖書株式會社『日本文學大系』第二十四巻版、一九二八年十二月再版）を使用する。

注17 遠藤光正論稿「渤海大使王文矩と嵯峨天皇の打毬詩」（財団法人無窮會『東洋文化』復刊第八十六号、二〇〇一年五月所収）。

王文矩の三度の来朝をはじめ、渤海使節の日本文化に果たした役割について究明している。

注18 日向一雅論稿『蛭』巻の騎射と打毬（『源氏物語 東アジア文化の受容から創造へ』笠間書院、二〇一二年三月所収）、先行論稿「源氏物語『蛭』の騎射と打毬」（『源氏物語 重層する歴史の諸相』竹林舎、二〇〇六年四月所収）がある。